

# アメリカから上海の日本人租界へ

— 家族史の中の祖父画一郎 —

杉野俊子

From the U.S. to the Japanese Society in Shanghai

— Grandfather, Kakuichiro, in our Family History —

SUGINO Toshiko

## はじめに

「孫たちよ！海外へ雄飛せよ」というのが、長い間家族の間でタブー視されていた筆者の祖父である鈴木無絃こと鈴木画一郎<sup>かくいちろう</sup>の遺言であった。画一郎（1878-1956）は1913年頃に個人的動機で遙か彼方のアメリカまで海を渡り、日本人排斥運動が激しくなる中、一時帰国中に『驚き入つる母国の社会』を執筆<sup>1</sup>し、47歳の時に再度アメリカに渡った下りは以前に論叢で述べた<sup>2</sup>。その中で、一介の元船員であった鈴木が、カリフォルニア州で起きた排日運動等についてほぼリアルタイムで語っている体験談や個人的見解を抜粋して描いた。また、新渡戸稲造のようなエリート留学生とは関係なく、画一郎のように全く個人的に渡航してアメリカから夢破れて日本に帰らざるを得なくなったのは、当時の日米関係とアメリカ政府の移民政策に依るところが大きい事と、また出稼ぎ労働者であれエリートであれ、当時アメリカにいた日本人は、人種差別と偏見の対象となったという事実を、日系アメリカ人の総体像と合せて浮き彫りにしてみた。

本論では、特に1930-45年の上海の日本人租界と引揚に至るまでの時代背景に焦点をあて、鈴木画一郎の著書とその息子（筆者の父）の鈴木健の著作<sup>3</sup>を基に、1. 鈴木画一郎の人物と海外へ憧れた背景 2. 上海の日本人租界 3. 日本人租界の鈴木家の生活 4. 画一郎の上海での生活 5. 引揚時の上海と鈴木一家の順で書いていく。島村<sup>4</sup>は、引揚げをめぐる学術研究はすでに定着しているように見られるが、「引揚者の戦後」、それもエリート層ではない一般の引揚者たちの戦後の暮らしという、取り組むべき大きな課題が残っていると述

べている。図らずも、父健はその投稿原稿（1972）の中で、「素材はまことに平凡なわが身辺の雑事である。背景は日本の突風怒涛の時代で、舞台は上海から内地に及んでいる。壮大なメロ・ドラマが演じられるところだが、躍り出たのはみみっちい小市民の群れで、舞台ではスポットライトが当たらない。しかし、本人達はまことに生真面目に踊りながら、舞台の陰から陰へと消えていくのである。」と記している。

本章では、それらの著作を手掛かりに、当時日本と上海に生まれ育った夫婦とアメリカで長年暮らした祖父の上海での暮らしぶりを、当時の世界情勢を鑑みて見ていきたい。

## 1. 鈴木画一郎の人物と海外へ憧れた背景

### (1) 画一郎がアメリカへ渡るまで

筆者の祖父画一郎は、1878年（明治11）に現在の磐田郡竜洋町に鈴木文太郎ときぬの4男として生を受けた。画一郎より22歳年長だった長男七二郎は役人で、郡長などを歴任した。七二郎は当時の民法により財産をすべて相続したが、浜松に移住したため竜洋町に残してきた田畑全部は不在地主として戦後に進駐軍の農地改革によってすべて没収されてしまったようだ。

地主の坊ちゃんとして甘やかされて育った画一郎も小さい時は普通のこどもと同様に海岸や河口の農地を自然の友として遊び回った。その画一郎が海外、特にアメリカに憧れを持つようになった遠因が二つ考えられる。1つ目は画一郎が幼少の頃に見た夢である。日本において日本人と外国人が入り混じって生活する夢を見てつくづく英語の勉強の必要性を感じ、ドック、キャットと独学で英語を勉強し始めたと著書に書いてある。2つ目は、七次郎の長男で、画一郎と2歳しか離れていない甥の茂が、アメリカに修行に行ったことである。どのように経緯で何の修行に行ったのか不明であるが、七二郎の財力からすると、恐らく私費留学をしたと思われる。その茂はアメリカで修行中に亡くなったが、画一郎に留学の夢を与えたようだ。

画一郎は法政大学の前身である法律学校（東京法学校）で学んだ後、1905年27歳の時に扇章汽船会社に入社した。長兄の記憶だと、日本の自動車のバイヤーが来日した際に通訳をしたが、初めてみる自動車のことが分からなかったらしい。逆に、そのバイヤーが「アメリカへ勉強に来ませんか」と画一郎を誘ったらしい。社交辞令かもしれないが、幼少時代から青年期にかけて英語を学ぶことにより夢が膨らんで海外に行ってみたいという強い気持ちだが、汽船会社に就職するという現実と結びついたのであろう。その頃、欧米に行く現実的な道は、政府から選ばれて派遣されるか、開拓移民になるか極めて限定されていたので、画一郎に残された道は船員になることだったようだ。自著の中にも、欧米や南北アメリカの諸港を訪れて、航海中雑多な人間に接近して見聞を広めたのは一生の利益であったと述べている。

## (2) 移民としてアメリカへ再度渡る

欧州大戦の最中に船員を辞め、1人息子の健<sup>けん</sup>を長兄宅に預けて大正初期の1913年に、37歳で移民としてアメリカ大陸に渡った。扇章汽船会社を辞めた理由は、年来の主張である海外発展こそ国のためという目的意識と船員生活の現実とのギャップがありすぎたことと、学閥や財閥の関係で地位の順序が保たれないせいであったと述べている。

画一郎が移民として渡った時代は、アメリカへの移民は、船賃、旅券申請費用など高額のコストがかかった上、「日本の国威」を保つため申請者が健康で文字が読めなくてはならないので、1908-1924年（明治41-大正13）の間に入国した日系移民は、農場労働者・労働者・家事労働者は30%だけで、その他は40%近くが専門職・ビジネスマン・熟練労働者であり、30%以上が自営農民だった<sup>5</sup>。また、東海岸の有名私大へ留学した裕福な日本人子弟とは異なり、西海岸へやってきたのは「学生」と称する貧乏書生で、旅券発行の43.7%を占めた<sup>6</sup>。彼らの多くは、排日気運が極度に高まった1900年代後半に、アメリカ滞在の長期延長を真剣に計るようになっていた<sup>7</sup>。

1922年、合衆国裁判所は、帰化の申請を出した日本人移民に対し、「明らかにコーカサス（白人）人種ではない」という理由で市民として帰化する権利を否定し、1924年の移民法で「市民となる資格の外国人の入国を禁止した<sup>8</sup>」。この移民法は、明らかに日本人を標的にしていることから、排日移民法と呼ばれている。

画一郎の自著にも、莫大な富を作ったあとに「忽かに事業の蹉跌<sup>にわ</sup>で元の本阿弥<sup>まてつ</sup>、在米六年間の苦心は一朝空に帰した」と記している<sup>9</sup>。実際何があったのか本人は何も弁明していないが、土地にからむ問題があったことを自著の中でも臭わしている。高い金を出してせっかく手に入れた小作地を排日派に目を付けられ、カリフォルニアでは小作権も禁じていると詰め寄られ、止めなければ裁判沙汰にすると脅かされて、裁判に持っていかれたら勝ち目がないと自ら手を引いたのではないかと推測される。

## (3) 再々度アメリカへ渡る

再びアメリカに渡る意志を残して、画一郎は1921年（大正10）43歳の時に帰国した。激しい遺産争いの後に、何とか金策に成功した画一郎が再々度アメリカ西海岸に渡ったのは1925年（大正14）47歳の時である。その様子を父健が詳しく記述している。

また、春が訪れて来た。間もなく画一郎がアメリカへ旅立つ日が来た。健は横浜まで見送って行った。近くに運河が流れていた。健は外に出てその河に行き交う蒸気船を眺めていた。髪を分け赤いネクタイをつけた少年が近づいて来て、健にガムをくれた。岸壁には大洋丸の巨体が横づけになっていた。健は心が弾んだ。船の中には特有なペイントの匂いがして、別世界に入っていくような気がした。この船の事務長は画一郎の友人だった。「坊ちゃんを置いていくのかい。」と事務長も言った。「パスポートも手に入らんしね、田舎（浜松）には大きな家もあるからね」と画一郎は弁解のように言っていた。やがてドラが鳴り渡って出発の時期となった。「体を丈夫にして、しっかりやりな

さい。お父さんは近い中にきつと迎いに来るからね。」と画一郎は健の手を固く握って言った。その眼には涙が光っていた。健も悲しくなって急いでタラップを駆け下りた。<sup>10</sup>

再々度アメリカへ渡ったのは1925年（大正14）で、健が1935年（昭10）に上海に呼び寄せるまでの10年間アメリカ西海岸にいたわけだが、期間の長い割には資料が乏しい。

「おじいさんは独り暮らしで、職場も転々としたらしいので、知人なども余りなかったのではないのでしょうか。ただ移民の中ではインテリだったので、心のうっ憤を文章などにとどめてあるかもしれない」という父健の言葉を手掛かりに、故岡省三氏の助けもあって1983年に画一郎と健が映った写真付きの絵葉書と邦字新聞の寄稿文をカリフォルニアで見つけることができた。写真の中の健は4歳以下で、子どもが背広を着て、髪を分けているなどあの頃（大正4年頃）では全く先端的なことだったと父親自らが書き記している。また、寄稿文は「日本移民40年史」の邦字新聞に、在留邦人が排日に抗していかに闘ってきて現在があるかを画一郎が明確に記したものである<sup>11</sup>。

長兄の記憶だと、ヨセミテ公園の大きなトンネルの所で自動車と画一郎本人が映った写真と、ハリウッドの撮影場所で日本の名優「早川雪舟」と一緒に映っている集合写真を見せてもらったようだ。

「おじいさんの件、本人が過去を余り話さなかったし、私も余り尋ねなかったので、はっきりしないが、明治のキリスト教の普及に尽力しキリスト教上三村時代を築いた松村介石と私淑していたようで、氏が刊行していた「道」という機関誌にも投稿していたようです。勿論松村さんは早くからアメリカに渡ったこともあるでしょうから相当以前からの知り合いかも分かりません<sup>12</sup>」。しかし、上記の絵葉書と寄稿文以外の手がかりはなかった。

1935年（昭10）、健が23歳の時に画一郎を上海によんだ。画一郎は57歳になっていた。

## 2. 上海の日本人租界

### (1) 上海育ちの母親幸子

筆者の母幸子の父親は、もともとは鎌倉の出身であるが、大正初期に中国の上海に渡り、昭和5年頃は、前田洋行、昭和7年には三菱銀行ビル内で日中商業通信社を経営していた。母幸子は1917年（大正6）6月に上海北四川路にて誕生し、1924年（大正13）に上海第一北部小学校に入学した。1928年（昭和3）に上海内乱と、1932年（昭和7）1月の第一次上海事変の際は鎌倉の小学校と女学校に編入したが、上海第一日本高等女学校を卒業するまで基本的に上海の日本租界の日本人家族の長女として生まれ育ったが、欧米の文化と教育の影響を強く受けている。ちなみに実母は亡くなり養母が生んだたった1人の弟は1944年（昭23）9月に25歳の若さでニューギニアにて戦死している。

### (2) 日本育ちの父親健<sup>けん</sup>

父の鈴木健は1912（明治45）年に静岡県に生まれ、1932（昭和7）年浜松師範学校を卒

業後、上海に渡り昭和8年10月に上海中部日本尋常小学校（以下中部小）に奉職した。上海に渡ったのは、単身アメリカに渡った健の父親画一郎が大きな理由になっていた。

健の父親の画一郎は、前述のように自分の子どもの健を、長兄夫婦に預け、アメリカの西海岸に単身渡航した。父親の健は9歳になるまで、叔父・叔母を実の両親、実の父親を「アメリカの叔父さん」だと思って暮らしていた。1921年（大正10）に画一郎が一時帰国した。その理由は、金策で、金策先としてもっとも容易なところは大地主であった実家だった。画一郎が再度アメリカに渡る4年後まで、特に金を無心する際の画一郎の激しい性格などを目の当たりにした父健は、1933年（昭和8）に浜松師範専攻科を卒業した後、養父母にこれ以上迷惑をかけたくないという気持ちもあって就職先は上海を選んだのだ。

そのような原因となる出来事をいくつか父健は「父帰る」という文章に書いている。

このところ、暫く顔を見せなかった画一郎が来て、田舎（竜洋町）へ連れて行ってやろうと誘った。健は嫌だったが、ことわり切れなかった。ことわると画一郎の機嫌が悪くなり、家中の者が不安で暗くなるからだった。田舎では見知らない人達と画一郎は長い間話し込んでいた。中略。画一郎が用件を終えて帰る頃にはすっかり暗くなっていた。田舎道を近くの町へ向かって歩いて行った。「今日は大金が入るので、お前にも来てもらったんだ。夜道はあぶないからな」と画一郎はおどけたように言った。健は父（七二郎）との争いの原因を薄々感づいた。画一郎は遺産争いをして父から土地を強奪したのだろう。その土地を親類の者に売ってお金を貰って来たに違いないと思った。夜空には星が美しく輝いていた。ながらく船に乗っていた画一郎は、この星空を指さしながら、健に星の話聞かせた。その声は活き活きとしていた。』<sup>13</sup>

22歳年下の弟の画一郎に痛めつけられた養父の七二郎は、そのことで健に恨みがましいことは一度も言わなかった。しかし、父健が6年生の時、七二郎は退官してずっと家に居るようになった。ただでさえ嚴格だった七二郎はますます小言が多くなったので、それを避けるために父健はますます運動に夢中になっていった。

放課後になると直ぐ道場にとんで行った。相手にぶつかって投げたり投げられたりしている時な何も考えなかった。家には出来るだけぐずぐずして寄り道をしながら帰ったようだ。こんなことを繰り返していたので、勉強する暇はなく健の成績は増々低下した。

結局柔道は黒帯をとるまでになり、上海の中部小では、担任は3年1組、委員は図書委員、専門教科は柔道の担当することになった。

### (3) 共同租界とは

租界とは、現在の中華人民共和国（当時の清国）内の外国人居留地のことをさす。日本が中国に租界を開設したのは、日清戦争（1894-95）に勝利した後で、その後終戦（1945）まで続いた。中国近代史において設立された全専管租界の中で、1843-1844年の最も早い時期に上海と廈門に土地を借り、貿易が一番盛んで、経済の面で一番繁栄していたという意味で、最も典型的で最も重要だったのはイギリス租界とされる<sup>14</sup>。それに後れをとること10

年、上海のイギリス人とフランス人とアメリカ人が土地を借り、共同で中国における最初の租界を形成した。中国に租界を開設した唯一のアジアの国である日本は、当時まだイギリスやアメリカと抗争する力がなく、実際に租界を置いたのは天津と漢口だけで、上海などでは共同租界に入り込み、そこで勢力を拡大する策をとった<sup>15</sup>。上記4か国の他、ドイツ、ロシア、ベルギー、イタリア、オーストラリアも比較的遅い時期に開設したが、いずれも影響力のある重要租界ではなかった<sup>16</sup>。

陳は、日本人の心の内では、上海はアジア大陸における「ヨーロッパ」であったと述べている<sup>17</sup>。母親の話の中にも、「バンド」「ガーデンブリッジ」「スコッツロー」という言葉がよく出てきた。これらの場所は当時近代化していた上海の代表的建造物と場所の名称であった<sup>18</sup>。当時の様子を、1939年（昭14）の中部小学校発行の10周年記念号の中で、小学6年生が寄稿文で表している。

「内地のお友達へ：（前略）これから上海の様子をお知らせいたしましょう。僕たちが住んでいる虹口も皇軍のおかげで安全になり今では街に電飾が輝いている程にぎやかになりました。（中略）そうして、ブロードウエーマンションの前にある有名なガーデンブリッジの橋を渡りて、バンドという河邊にある町を過ぎ更に進むと、あの有名な南京路に着きますと、内地では一寸見られない二階バスが行き来している中を、人々が縫う様に歩いて、その頭上には人々を見下す様にして、永安公司・大新公司・新新公司を始めとして、建築群の美しさを発揮するようにそびえています<sup>19</sup>。」

公共的文化建築は、都市の生活をより素晴らしくするという理念を一面で体现するかのよ  
うに、上海共同租界の外灘は銀行地区であると同時に緑地・公園地区、福州路・南京路は娯  
楽・ショッピング地区、河南路・寧波路は銭荘地区であり、共同租界の中心に位置する競馬  
場の外周は、競馬を催す大規模の娯楽場で、内側には公共の運動場を兼ね、各スポーツクラ  
ブに有料で貸出をしていた<sup>20</sup>。他に虹口公園など三つの公園の中にも運動場が造られ、共同  
租界の公共運動場でスポーツに参加した者は年に平均約4万人になったようだ<sup>21</sup>。

陳によると、1880年代に上海に来た日本人は、娼婦や貧しい農村出身者が多く、欧米の影  
響を受けた日本人からは、「彼らはアジアの日本から西洋上海に来たものの、本当の「脱亜  
入欧」は全然できていない」と反感を受けたようだ<sup>22</sup>。その後、日本人居留民の数は経済活  
動が活発化すると共に増加し、上海を第二の故郷として住みつき、上海の日本人居留民の半  
数以上に扶養家族がいた。例えば1936年（昭11）の統計では、2万3,672人のうち、商業  
が7,729人、公務・自由業が1,495人だった<sup>23</sup>。

呉淞路（習慣的に虹口と同義語）は日本人居留民の商業街とするならば、北四川は日本人居  
留民の高級生活住宅と公園、神社、学校、病院、書店などがある文化的な憩いの場ととらえ  
られた。母幸子の実家もこの地区にあった。日本人居留民に「新公園」と呼ばれた虹口公園  
は、当初は西洋人のために開設されたものだったが、1911年「およそきちんとした洋服を  
着た華人は進入できる」と規定後は日本人居留民にも西洋公園スタイルの休憩場所を提供す

るところとなった<sup>24</sup>。

北四川の中でも内山完造氏が経営していた内山書店の存在は上海関係の書物には必ず出ているほどである。四川北路にあったこの書店は、比較的自由に左翼的な出版物を販売していて、店内奥には、常連客の懇談の席が設けられ、文豪の魯迅（ろじん）を初め上海に来訪した日本の文化人と中国の左翼文化人との交流の場ともなっていた。

「店の片隅にある椅子に思い思いに腰掛け、完造さんを交えて談笑している姿がよく見受けられた。それらの椅子の中に白い籐の椅子があったが、魯迅が来れば必ず腰掛ける椅子だった。世界的な文豪魯迅との面識は、若造の私ごとき者にはあろう筈はなかったが、写真でその風貌を承知していた私は、店でお会いする度に畏敬の眼をもって迎えていた。魯迅は自分の専用の椅子以外には腰掛けたことがなく、偶々その場所が塞がっている時は、店の中をぶらぶらしたり、立ち話して済ますことが見受けられた。<sup>25</sup>」

結果的に北四川路は日本人学校の集中地になった。幸子が通った北部日本人小学校（上海尋常高等小学校）は、上海で最初の日本人学校だった。その他に、上海第一日本国民小学校、上海第二日本国民小学校（東部日本小学校）など10校もあった。

戦前、上海へ着任するには選考がかなり厳しかったので、各校とも概して優秀な教員が集まっていた。ここに1939年（昭14）の中部小学校発行の10周年記念号があるので、その中から数学教育と語学教育など現代の教育の在り方に共通する寄稿文があるので紹介する<sup>27</sup>。

「本校の十周年を顧みて一本校は昭和4年4月、俗に北部小学校と称する日本尋常高等小学校より分れ、同年8月在外指定小学校として独立した学校である。昭和2年日本尋常小学校の児童数が千数百名に達し、校舎校庭の狭溢を感ずるは勿論、教室として不適當な部屋まで使用せざるを得ない状態となるや、小学校の増設は当然のことではあったが、その時期、経費、位置などについて、具体的な成案を得るには、かなりの苦心を要し民團当局が本校設立を決定したのは、昭和3年1月の臨時民会であった<sup>28</sup>。」

「職員の研究感想「正しい算術」の教育：（前略）小学校に於て算術を教授するには先ず十分に之を認識して「正しい算術」を授けねばならない。正しい算術の教授をなすには種々の事が必要であるが、大切な事は十成る研究とよく工夫すると言う事にある。1. 諸種の研究-第一に教材の研究が大切である。教授法は一面教材の要求から生まれる。（中略）即ち算術教授の方法を生み出すために算術教授の困難を軽減するために、時代に適應せる教授を行うために又充実せる教授を施すために、我々は静かに教材の研究をしたいものである。第二は社会の研究である。教育者は社会の実際に疎遠であると聞くが正しい算術を教授するために正しい算術の教授のためには、新聞雑誌図書に親しみ活社会に接触して国民として当時の文化に適應する数学的常識を豊富にする事をわすれてはならない。第三は児童の研究である。（以下略）<sup>29</sup>」

「教育に関する種々の私見：（前略）次に英語の問題だ。英語は世界語ではない。世界語なら 에스ぺ란โต があるはずだ。何の必要あって中等学校及び大学まで国語科より以上

の時間数を取るのだ。当局が作用な誤った考えをしていればこそ英国人は我々を見くびり二等国民視するのだ。(中略) 英語よりむしろ支那語が必要の現在ではないかと思う(勿論文明の発達は西洋故に研究すべき人は一概にも言えないが)<sup>30</sup>」

近隣にある日本高等女学校を卒業したが、集合写真には瀟洒な校舎の前で当時としては「ハイカラ」な格好をして洋風の教育を受けた女子学生たちとインド人門番が映っている。このように生活面や教育面で恵まれた環境だったが、政局的には不安定な要素が多かった。

## (2) 上海内乱と第一次上海事変

1925年5月に上海で学生デモによる大きな排外暴動事件が勃発し、その後何回か外国人を威嚇する労働者や学生のデモが続いていた。1927年(昭和2)2月になると、蒋介石率いる北伐軍が北京の軍閥政府を打倒するため、上海に近づいてきたので、当時共同租界に住んでいた外国人約3万人はパニック状態になった<sup>33</sup>。その後、排日運動は激化し、排日教育と共に日本人に襲撃が行われた。欧米人も、北伐前は8千名いたキリスト教の宣教師たちも生命の危険を感じ、5千名が避難や帰国し、現地に残るのは500名内外になった。

1932年(昭和7)1月18日、第一次上海事変がおきた。事変以前から反日運動が盛んな上海だったが、事変が起こるとそれは日増しに険悪さを増した。1月25日に日本は排日事件の中心とされる「抗日救国会」の解散を上海市長に最後通牒をした。しかし3万に上る国民党第19路軍が日本居留民の住む共同租界に迫ってきて、最終的に日本は鎮圧に陸軍の投入を決定した。

第一次上海事変が収束すると、鎌倉の実家に避難していた母幸子はまた上海に戻ってきて、上海の日本高等女学校を卒業し、父との結婚に至ることになる。

## 3. 日本人租界の鈴木家の生活

### (1) 第二次上海事変前

前述のように、浜松師範専攻科を卒業した健は、1933年(昭和8)、21歳の時に上海に渡り、中部小学校に奉職した。健が上海に渡った理由の一つは、父画一郎のことでこれ以上、戸籍上の父七二郎と母たよに迷惑を掛けたくないという気持があったからだ。

二年後の1935年(昭和10)健が23歳の時に画一郎を上海に呼んだ。画一郎の方から言い出したのか、健の方から誘ったのか分らない。画一郎の年齢は57歳となり、あと3年で還暦を迎える年で、アメリカでの一人生活もそろそろ年貢の納め時と考えたことも確かである。上海で住むに当り、戸籍上健は画一郎の養子となったとのことである。

健は、画一郎を呼んだ翌年の1936年(昭和11)に前田幸子と結婚した。健24歳、幸子19歳の時である。死処を求めて上海に渡った父親健は結婚相手に現地生まれの日本人女性を望んだ。その理由は、上海の不順な気候では日本から連れてきた女性では健康面で不安が

出てくるのではないかと感じたようだ。結婚式は上海神社で、母親は角隠し、女性陣は和装、男性陣はモーニング、画一郎は真ん中でイギリス紳士のような恰好で取まっている。

家は2個建て、画一郎が住んでいた家は1階が応接室、2階が居室、3階が風呂場であった。健と幸子が住んでいた家は、1階に食堂と奥に台所、2階が居室、3階が客間であり、通常私的には3階のサンテラス風の風呂場から行き来していた。ここで、親子とは言え、画一郎と健ははじめて一緒に生活することになり、ましてや、それに幸子という全く赤の他人が加わって、上海での生活が始まったのである。

画一郎の死後、家で画一郎のことを話すことがタブー視された。元と言えば、健と幸子の結婚時代に遡るのである。船員生活と米国での生活が長かった画一郎は、完全にアメリカナイズされ進歩的であると自負する一方、孔子など中国の古い学問や漢詩などに趣味を持ち封建的であるという複雑な思想の持ち主であった。一方、幸子は日本人家庭の日本人社会で育ったとはいえ、学校でも先進的な教育を受けていたので、当時の美德とされた「女は控えめにするべし」という感覚はなかった。父健は厳格な役人の家庭で育ったので、家庭では礼儀を重んじ我慢を強いられる生活をしてきた。

画一郎は、息子の健や嫁の幸子のやることが気にいらないことが多く、しばしば暴力的でもあった。たとえば、妊娠中の幸子の挨拶の仕方が悪いと言って怒って体に悪影響を及ぼすほど叱りつけたり、健が親よりも先に風呂に入ったことに腹をたて、風呂桶を叩き割ってしまおうとする程だった。これは一例を示したにすぎず、新婚の幸子にとって画一郎に対する恨み辛みはもっと一杯あったのである。幸子ばかりでなく、幸子の父前田喜久治が鈴木家をよく訪ねて来ても、灰皿を置く場所一つにして、画一郎が「オーノー、ノー」と剣もほろろであるために、段々と来なくなってしまった。日頃の外出もままならず、ついには、父喜久治の葬儀にも出席できなかつたと母幸子は死の間際まで愚痴をこぼしていた。画一郎に対する愚痴を母幸子がよくこぼしていたので、「父健から文句を言ってもらえばよかったのに」と母幸子に言えば、『駄目、駄目。何かあると直ぐ「仲人を呼べ」と怒り、仲人は中部小学校の校長の石井さんだったの。』と母幸子の弁であった。

健が上海に渡り、画一郎を呼び、幸子と結婚をする頃の上海は第一次上海事変と第二次上海事変の間で比較的平和であった。1931年（昭6）9月18日、満鉄沿線柳条溝の線路爆破で勃発した満州事変の影響はすぐさま上海にも及び1932年（昭7）1月28日から同年5月5日まで第一次上海事変と化した。じご日本は国際連盟の正式脱退とかワシントン海軍条約の破棄等苦難の連続であったが、上海においては比較的小康状態を保ち、次に緊張状態に入るのが1937年（昭和12）であった。

## (2) 長崎への避難と第二次上海事変

1936年（昭和11）の年明け以来、日本人狙撃事件が頻繁におきていた。上海でも、例をとると、自宅近くを和服で散歩していた三菱商事社員が頭を撃たれて即死した<sup>34</sup>。翌年の

1937年（昭和12）7月7日、日中戦争の発火点となる盧溝橋事件が起ってまもなく上海の対日感情も次第に険悪となり、ついに同年8月9日第二次上海事変へと発展した。日本は、はじめ上海居留民の現地保護を決定したが、のちになってこれを変更し、8月19日までに婦女子を内地へ引きあげさせた。

「盧溝橋事件が勃発し、北支に戦雲が広がると、上海もまた抗日の気運が急速に高まってきた。邦人を狙ったテロが頻発し、街に縦断が飛び、爆弾がさく裂した。中国軍は公然と移動をはじめ、万一に備えて我が陸戦隊も集結を始めていた。戦機は刻々と熟しつつあった。このころ家内は身重だった。産み月まで平和は保てそうもなかったため、私は夏季休暇を利用し家内を長崎医大に託した。予期した通り戦端は間もなく切って落とされ、砲火の真只中に私は上海に戻ってきた<sup>35</sup>」

父健は、その戦乱後最初の連絡連に乗って長崎から上海に帰ってきた。「船の中で、私服の刑事が、何も君、わざわざ戦争の中へ帰って行かんでもいいではないか、と咎めながらも通してくれたが、勤務先が上海にあったので、帰るのは当然だと思っていたからだ」とあるが、上海に残してきた画一郎も心配だったのかもしれない。

上海に残った画一郎は、8月15日、中部小学校に避難をし、長崎から1人で戻ってきた健と19日に再会、以後9月半ばまで1ヶ月余中部小で避難生活を送っていた。画一郎は、避難中の感想を中部小学校の機関誌「育ちゆく」に投稿している。

「中部校」の石井校長より、倅健を通じて、同校避難中の個人的感情を書けとの仰せであった。誠に有意義な企てなりと信じ直ちに快諾。

愛に、富に、自由に、また歓楽に極まる事無き国際都市の上海。その栄華を誇れる今の姿は如何に？指を屈すればすでに一年有半を過ぎ。(略)。回顧すれば1937年（昭和12年）の8月13日、八時橋辺りの一発に端を発し、東洋随一の麗都はただち戦塵の巷と化し、三面包囲の戦線実に50里に渡り、幾十万を以て数うる敵軍に対し、我が皇軍は最初陸戦隊の憲兵を以てこれに当たり、市外の要所に土囊陣地を構築し戦線が貼られた。(略)。2日目の8月14日には敵軍の空襲があって、我が居留民に恐怖を与えた。(略)この夜拙宅四達路の北部と江蘇路の西部一帯には激戦があり、轟々たる砲撃で睡眠もできず、終夜屋上に潜み敵の襲来を見ていた。夜の明るを間違って避難せんとしたが、スコッツ路、北四川路の方面の通行は甚だ危険であった。私が「中学校」に避難したのは、8月15日の朝で、陸戦隊のトラックに助けられ避難の途中、陸戦隊本部へ立ち寄ったが、広大な建物の中ほどに的の砲弾を受け、階上階下の破壊せる模様を見て、無量の感に打たれた。中学校にはすでに1,300人の避難民がいて、混雑を極め、4階の一室に入った。寝るにはアンペラの上へ持参の毛布を敷き、一室に数十名または百数名ごろ寝の有様だった。(略)

(17日に敵の砲撃があり)、4名の重症者を出した。この部屋には私自身もおり、負傷せ

る一婦人の荷物を運んで階下に降りていたため、難を逃れ不思議に命拾いをした。」

最初2個師であった中国軍は、15日になると3師団が参戦し7万あまりとなった。日本側は、陸軍2個師団を上海に派遣して、上陸・攻撃を行ったが阻止されたので、更に三個師団を投入して同年11月9日に上海全域を完全に占領したが、日本側は3ヵ月で約4万人の死傷者を出したと言われている程の激戦だった。

長崎に避難していた幸子は長崎の病院で昭和12年9月6日に第一子の達徳<sup>たつり</sup>を生んだ。上海に平和が戻って来たので、昭和13年になって幸子は母子ともに安全に上海に帰っていった。上海で激戦があったにもかかわらず、母親はこの頃のことを「おじいさんもないし、実家の母が連れ添ってくれて本当に楽しい日々だった」と述懐していた。

#### 4. 画一郎の上海での生活

画一郎にとって達徳<sup>たつり</sup>は初の孫である。目に入れても痛くないほどに可愛がったようである。親が子供の達徳を怒ろうものならば、親がかえって画一郎から怒られる始末であったと母親の幸子が言っていた。子供はその後昭和14年に善勝、16年に絹恵、18年に南海雄、20年に文徳と“生めや増やせや”の合言葉とおり多産であった。

終戦時小学校に上がっていたのは“達徳”だけで、孫たちは皆小さかったので、上海時代の画一郎の思い出は少ない。幼児も年長になってから、画一郎のベッドで毎晩寝たような記憶がある。夜になると、お風呂場を通して画一郎の2階の居室に行ったのである。画一郎の部屋には、皿の真ん中にガラスが突き出たジュース製造機があり、みかんなどの半切りを絞ってみかんジュースなどを画一郎が作ってくれた思い出が浮かんでくる。また、長兄の思い出によると、両親（幸子、健）との確執はこどもにはわからないが、唯、彼をはさんで自宅の3階の階段で腕を引っ張り合い、どちらの部屋へ連れていくのかという騒動があったらしい。結局泣き出したため、両親があきらめて祖父の部屋へ行ったようだ。

大きなバラの茂みある庭で撮った写真の中の画一郎は、長男・二男・長女との普通の家族写真でも、コートを着てネクタイを締めた紳士風でいる。幸子が90歳になった時、60年ぶりに上海を訪れる機会に私も同行した。上海のこの家を見つける手がかりになったのはこのバラの茂みだった。

不思議なことに、上海事変中避難していた中部小は画一郎の息子の健が勤めている学校であり、健も避難体験について詳細に記述しているのもかかわらず、お互いについて一言も言及していないのである。同じ体験でも、父親は同僚、食べ物、皆の様子、画一郎は上海事変の戦略や軍の動向について書いている。また、健は必ず「いまや破壊しつくされんとしている戦場に眼を放ちながらしばらく立っていた。北停車場に沿った英軍警備区域の租界では、中国人が群れをなして眼前に展開されている悲惨な新戦場を虚しく眺めていた」と中国側の見方に触れている。

父健の著作の中には、揚子江のデルタの上に建設されたこの都市は、不潔なクリークに取り囲まれていて、住民の衛生思想は低く、施策も不徹底であるために、コレラやチフスの伝染病が流行り、長男、二男、長女が次々と大病にかかった様子や、散歩中に見たひまわりの壮観に驚嘆したこと、上海の食べ物やお酒、上海事変と大東亜戦争についてかなり詳しく書いている。また、内山書店に日参するようになり、著名な内山完造氏について、氏との思いでも詳しくかいている。

「完造さんは中国の風土を愛したが、真底好きだったのは中国人そのものであった。人と人との結びつき、その社会機構に古い歴史を背負った豊かさ、おおらかさがあり、日本人の鋭々しい島国根性には見られない良さがあつた。さらにまた中国の大衆は、為政者や上層部とは別に、幾千年を生き抜いてきた底力があり、平等と繁栄を求めて蠢動していた。庶民の総力を結集する時、中国の救いがあると完造さんは洩らしていた。」

しかし、父親画一郎についてはほとんど何も書いていないのである。どこの会社に勤めていたか、どんな日常生活を送っていたかがまったく著作から見えてこないのである。唯一、日中戦争に突入した頃、画一郎は日本金で10万円持っていたと健の書き遺した「インフレ」に書いてある。『10万円あれば当時の日本では大地主とまではいなくても、かなりの土地が持てた筈である。「内地に帰って、土地や家を買って置きませんか。」「いや、貯金して置く。貯金は子を生むからね。」と画一郎は一向に健の提案を採りあげない。その中に戦争は拡大され泥沼の様相を呈しはじめると、インフレは徐々にその鎌首をもたげはじめた。貨幣価値が低くなるので、他人事ながら心配になって来た。間もなく南京政府が出来、新たな通貨として儲備券が発行された。日本金との交換レートは5.5ときめられた。画一郎は喜んで早速貯金を儲備券に切り替えた。「どうだ、五十五万円になったぞ。」と得意になって貯金通帳をみせびらかした。太平洋戦争が始まってインフレは日毎に烈しくなって来た。高級紙幣が次々と発行され、遂には一万円紙幣が出るようになった。健は画一郎に重ねて忠告した。「どうです、ここらで貯金を出して確実な物資を買っておきませんか。」「いや、戦争はきっと勝つから大丈夫だ。貨幣価値は変らんよ。」なかなか頑固である。健はもう呆れて二度とその金については口を出さないことにした。間もなく一万円では何も買うことができなくなった。日本金との交換も制限され、内地送金は事実上不可能になった。戦争は破局に向い、インフレは気違ひじみた高騰を続けたまま終戦に及んだ。(略) 画一郎の貯金もこれで終止符が打たれた。』

画一郎について一番知りたかったのは彼が上海で仕事をしていたかどうかだった。じっとしているのは苦手な画一郎だからきっと何かをしていたに違いないと思っていたら、終戦当時8歳、この当時は6歳の長兄が覚えていた。「ミスターゴードン」という英国人と「貿易」をしていると本人から聞き、また、そのオフィスに入ったことがあり、1941年(昭和16年)に開戦し、日本軍に抑留されたミスターゴードンに包装紙の両端を開け、中が見えるようにしてカートンのたばこを差し入れた時に同行したとのことだった。

アメリカから一文なしで帰ってきたはずの画一郎が大金を持っていたことも、貿易をしていたことも驚きである。また、若い夫婦にとっては酷くあたった画一郎も孫には大変優しくかったという側面があった。

## 5. 引揚時の上海と鈴木一家

1945年8月15日に、一家は上海で終戦を迎えることになった。上海事変の時のような空襲や銃撃戦などがなく、食糧は限られていたが普通に食べていけたようだ。

私達は敗戦を迎え、前途の不安に多少の動揺を覚えたが、生活が昨日と一変したわけではなし、陸戦隊が相変わらず治安維持に当たっていて中国人の妄動もなく、敗戦の実感が身に迫って湧いて来なかった。それどころか軍備は一層嚴重になり、米軍に一矢報いようとの機運が俄かに昂まって来た。大陸には無敗の日本軍が百万といる。例え祖国と分離しても米英と決戦するまでは降伏しない、とまことに意気壮んであった。中略。急激に昂揚した戦意は一週間でびたりと止んだ。三笠宮殿下が総軍司令官を説得に来たとのことだった。中略。憲兵を含めた中国の先遣部隊が現れるに従って、日本人の取り扱いがだんだん厳しくなった。抑留地域が決められ、日僑と明示した腕章をつけてその地域の中だけで生活しなくてはならなくなった。

私の家は幸いに抑留地域の中にあっただけで移動する必要がなかったが、移動の途中で、暴漢に襲われ、殴られたり掠奪されたりした者がかなりあった。中略。第三軍の南下するにつれ、奥地から順次武装解除が行われ、陸戦隊も遂にまる裸にされた。街の警備は中国軍に移った。その頃から一時小康を得たインフレが再び頭をもたげ、生活はいよいよ苦しくなった。治安もなんとなく乱れがちで、新たな動揺が起こる心配が漂いはじめていた。私達は危険を感じ必要のない限り外出しないようにしていた。帰国の日を待ってひっそりと暮らしている日本人の抑留生活を真新しい自転車に乗った（中国人の）憲兵が颯爽と巡回していた<sup>36</sup>。

二男は、「上海のわが家は日本人抑留地域内になっていた。画一郎が家の前の空き地を利用していんげん豆などの農作物を作り、自給自足体制を図っていた。このいんげん豆を盗ろうとした中国人を画一郎が捕まえて懲らしめているのを見た。戦争に負け、中国人が威張りだした時期に、そんな事をして大丈夫かな、と小さいながら心配したことを憶えている。また、朝方、蒋介石軍の軍人が二人、画一郎の居室に通じる階段を颯爽と下りてくる姿を目撃した。画一郎の知り合いの軍人であったと思うが、上海の家に一泊したのであろう。階段を下りるその姿がなぜか印象に残っているのである」とその記憶から書いている。

終戦後抑留生活の不安の中で、四男が生まれ、この子を無事に引き揚げさせることが一家の大きな課題であった。この子のミルクは抑留中には何とか手に入ったが、引揚後のことを

思うと不安は一層高まっていったようだ。家族の安全を第一に考えた健は出来るだけ早く帰国しようと決意し、決意してから一週間後に鈴木家の隣保は幸いに帰国できるようになった。

一家は、1946年（昭和21）4月に、父（当時34歳）・母（29歳）・祖父（67歳）と5人の子ども（8歳、6歳、4歳、2歳、5か月）の総勢8名で、上海から祖父方の実家がある浜松市に引き揚げてきた。

## おわりに

祖父画一郎については、家族の中で長い間タブー視されていた。「アメリカから一文なしで帰ってきた」「自分のことしか考えないエクセントリックな人だった」「本当に酷い人だった」と、事ある毎に母親から聞かされていたからだ。「おじいさんに似ている」と言われるのが家族の中では侮辱の言葉となっていた。

あえて画一郎を擁護すると、自由にのびのびと育った母親の幸子、日本で厳格に育てられた父親の健と同居した画一郎は、19歳で社会生活を送っていない未熟な幸子に嫉のつもりで酷く接したかもしれないし、同居をしたことのない息子の健をとられたような気がしていたのかもしれない。

上海での祖父画一郎を語る資料は少ないが、相対的に見ると、画一郎は満足していたのではないと思う。憧れて行ったとはいえ、アメリカではアジア人の移民として白人の中で生きていくことは容易ではなかったに違いない。排日法などの人種的民族的差別の対象になった上、そのために儲けたお金も一瞬のうちに失ってしまったからだ。

上海では、中国とはいえ、国際都市でありヨーロッパの文化と生活様式を保てる上に、英語を使って貿易の仕事などが出来、排日抗争があったが関東軍などに守られていたわけなので、アメリカでの生活とは圧倒的に違ったであろう。また、イギリス人のゴードン氏と貿易の仕事をするなど、英語を使って知的な仕事をするのが画一郎の理想であったから、その点も満足をしていただろう。

健も画一郎も、幼少の一時しか一緒に住んでいなかったのに、不思議な共通点がある。二人とも英語と漢詩に長けていたことだ。しかし大きな違いは、健は中国人の友達を作り、中国人の立場を理解しようとしたが、画一郎はあくまでも欧米に傾倒していて、逆に中国人を見下すような態度を示した。画一郎は自分自身が排日の対象になったのに、当時のほとんどの日本人がそうであったように上海では中国人には優位性を感じて過ごしていたようだ。上海で生まれ育った幸子は、中国人、欧米人、日本などの人種や民族性の区別なく、自然に国際的な感覚を身に着けていた。相対的に、画一郎は日本の若者に対して世界に出るようにと啓蒙していたとはいえ、英語と西洋に傾倒していた点で、現代のグローバル化に伴う日本の施策に共通するところがあるかもしれない。

いずれにしても、画一郎にとって一番の幸せは、父親の給料で生活も安定していたこと

と、何やかや言っても家族と一緒にいられたことではないだろうか。「おじいさんは優秀な人だったが自分のことしか考えていなかった」という評価に加え、兄弟からは「おじいさんとしては最高だった」、「その時代の普通の男性だったと思う」という長兄からの眼からうるこのコメント添えて、個人的な意思や夢が政治や戦争に翻弄された時代を生き抜いた、1人の日本人男性の人生の記録を現代に蘇らせることで、家族史の1ページが増えたことに感謝している。

## 謝辞

この拙稿をまとめるに当たり、今は亡き父健・母幸子と、現在も健在な長男達徳<sup>たつのり</sup>（78歳）、二男善勝<sup>よしかつ</sup>（76歳）、長女絹恵<sup>きぬえ</sup>（74歳）、三男南海雄<sup>なみお</sup>（72歳）、四男文徳<sup>ふみのり</sup>（70歳）に深く感謝の意を表したい。長男は上海の画一郎の思い出を、二男はアメリカのサクラメントまで出かけて資料をまとめてくれた。画一郎が愛したアメリカの独立記念日で、画一郎の命日の7月4日に。

## 注

- 1 鈴木無絃 (1924)『驚きいつる母国の社会』(第二版)(二松堂書店, 1924) はじめに2. オリジナルの旧漢字は常用漢字に直したが、言い回しはそのまま引用した。  
むすこの鈴木健もこの本の存在は知っていたが、実際の本が国立国会図書館で見つかったのは2008年12月のことだった。
- 2 杉野俊子 (2012)「アメリカでJap (anise) として生きること - 太平洋の向こう側に夢を求めた日本人男子のモノグラフから」『工学院大学研究論叢第49-2号』1-16
- 3 鈴木健 (1972)『流れの中に』未発表著書。筆者の父親の鈴木健が1972年に芸芸春秋社に投稿したが不採用になった。元原稿は手書きだったが、後に二男の善勝がワードで打ち込んだために、ページ数は不明である。以下、ページ数は不明のまま記載する。平成2年に父親が亡くなった時に編纂。筆者がじっくり読んだのは平成27年の5月である。
- 4 島村恭則編 (2013)「序章 引揚者の戦後」『戦争が生み出す社会II- 引揚者の戦後』1-10、新曜社
- 5 Dairy, William, Jr, 南川文里 (2006) 樋口映美、中條猷編「水平移動・人種・アメリカ化—移民をめぐるマスターナラティブ批判」『歴史のなかの「あめりか」』349-368, 357、彩流社
- 6 阪田安雄 (2002)「太平洋を跨ぐ北アメリカへの移住— 定住をめざす逆境での苦闘—」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』、19、人文書院
- 7 阪田、前掲33
- 8 タカキ・ロナルド (1995)「太平洋を越えて— 金のなる木を求めて」(桑井輝訳) 富田虎男 (監修)『多文化社会アメリカの歴史: 別の鏡に映して』419-464、明石書店
- 9 鈴木無絃 (1924) 前掲、35
- 10 鈴木健、前掲、実際には著書の中では健と画一郎は別名が使われている。
- 11 1983年に鈴木健の二男で画一郎の孫にあたる鈴木善勝がスタンフォード大学に客員教授で招致された折、カリフォルニア・ファーストバンク日米歴史資料室の室長だった故岡省三氏の尽力で得たものである。
- 12 鈴木健が当時スタンフォード大学に居た鈴木善勝に宛てた1983年の書簡より。
- 13 鈴木健、前掲
- 14 費 成康 (Fei Chengkang) (2006)「中国における各国租界の特色 (武井克真訳)『中国における日本租界— 重慶・漢口・杭州・上海』神奈川大学人文学研究所 (編者) 234-264、お茶の水書房
- 15 費、同上、251
- 16 費、同上、256
- 17 陳 祖恩 (Chen Zuen) (2006)「西洋上海と日本人居留民社会 (谷川雄一郎訳)『中国における日本租界— 重慶・漢口・杭州・上海』神奈川大学人文学研究所 (編者)、201-230、お茶の水書房
- 18 バンド (The Bund/<sup>ブイケン</sup>外灘) は海岸通りを意味する。岸部には広いプロムナードが整備され、建ち並ぶ近代建築群は夜ごとにライトアップされている。ガーデンブリッジ (Garden Bridge) は蘇州河にかかる橋で通称「白渡橋」ともいう。現在の橋は1907年完成の鉄骨橋。バンドの端にあるPublic Garden (黄浦公園) と対岸の(旧)プロードウェイマンションや旧ドイツ領事館を結ぶ。スコツローはスコット路 (施高塔路、現在の山陰路) で魯迅公園の東側を南北に走る日本人租界地域にあったScott Roadという英語名の道路である。
- 19 同上、六年一組 中多啓二寄稿、106-107
- 20 羅蘇文 (2006)「近代租界の欧米建築の文化遺産についての試論 (村井寛志訳)『中国における日本租界— 重慶・漢口・杭州・上海』神奈川大学人文学研究所 (編者)、282、お茶の水書房
- 21 道場、羅蘇文、282
- 22 陳、前掲204
- 23 陳、前掲213
- 24 陳、前掲211
- 25 木之内誠 (編著) (2007)『上海歴史ガイドマップ』第六刷、大修館書店 114
- 26 鈴木健、前掲
- 27 上海中部日本尋常小学校 (1939)『育ちゆく— 十周年記念号』滔々会事務局 吉澤美子。杉野が現代仮名遣いに直したもの。

- 28 上海中部日本尋常小学校、同上 25
- 29 同上、福山清一郎寄稿、50-51
- 30 同上、立木泰次郎寄稿、61-62
- 31 田中秀雄（2014）『日本はいかにして中国との戦争に引きずり込まれたのか』草思社 68
- 32 田中秀雄、同上 93
- 33 田中秀雄、同上 209
- 34 田中秀雄、前掲
- 35 鈴木健、前掲
- 36 鈴木健、前掲

(すぎの としこ 本学教授)

